

no.3

SDGsは
まちづくりの共通言語

加藤 秀弥

SDGsまちづくりに関わって四年

名古屋市のSDGsまちづくり推進事業に当社が関わって今年度で四年目になる。令和四・五年度は熱田湊・有松、令和六・七年度は名駅南・平針南を対象に、ワークショップ等を通じて地域課題の解決に向けたアクションの検討と実践の支援をしている。令和六年度、名駅南では、住みたくなる・立ち寄りたくなるまちを目指して、地域で開催されるイベントに併せて、「ペットボトルキャップアート」や「土に還る粘土でハンギングバスケット」等を彩る「アートづくり」等を実施し、多数の来街者に「環境」という視点を通じて、名駅南が楽しいまちであると体感してもらえた。令和七年度、平針南では今年度に「細口池公園の生き物調べ」等を実施を計画中である。



ペットボトルキャップ約6千個で作った「アイルブス駅南（まち協ロゴマーク）」



微生物の力によって土に還って肥料となる粘土を使用したアート作品をハンギングバスケットに展示

さて、昨年までもラバダブで本事業について報告してきたが、「SDGsを意識すること、なぜ・どのようにまちづくりにつながるのか？」と疑問に思う方もいるだろう。本稿では、実践を踏まえ、私なりの考察を述べる。

SDGsまちづくりの意義とは？

SDGsまちづくりとは、多様な主体の参画と経済・社会・環境といった分野の統合的な視点をもとに、十七の目標を通じて地域課題を捉え、解決に向けた取り組みを進めるプロジェクトであるが、その意義は大きく二つに分類され、と考える。

①多様な主体でまちの課題・将来像を検討できる場づくり

まちには、性別・年齢・価値観など多様な人々が存在する。加えて住民と就業者では、まちに対する考え方も異なる。彼らがSDGsの視点からまちの課題や将来像について対話する場を設けることで、地域の人々のつながりを生み、互いの価値観や課題意識を理解し、将来像の実現に向けた共通の目標を持つことができる、と考える。

②十七の目標に課題を当てはめることで、課題同士のつながりが見える

一見すると無関係に思える課題も、SDGsの十七の目標に当てはめて考えることで、意外なつながりが浮かび上がることがある。これにより、自分には関係ないと思っていたテーマも自分ごととして捉える契機となる（左図は実際にワークショップでつながりが見えた例）。



以上のように、多様なステークホルダーの参画によりまちづくりの裾野を広げ、SDGsという共通言語でまちの課題や将来像を共有することで、多面的な課題解決のアクションを実施できるようになると実践から見えてきた。

留意すべき点

一方で、課題解決のアクションを実施するために、留意すべき事項もある。

①特定のテーマに偏らない議論を

参加者の関心や地域の特徴によっては、どうしても特定のテーマに議論が集中しがちだが、持続可能なまちづくりの実現には、多角的な議論が不可欠である。そのためには、議論の場に多様な人々が参加できるような事前の準備・声かけと、多様な意見を引き出すファシリテーションが重要となる。

②実行主体の「持続可能性」を意識

アクションを一時的な活動に終わらせないために、持続的に取り組めるプロジェクトの構築が重要となる。そのために、アクションの中心となる地域のまちづくり団体やキーパーソンにとって無理のない範囲で始め、小さな成功を積み重ねながら徐々に活動の規模を広げていく計画が必要である。

SDGsを共通言語とした、より高度なまちづくりの実践

SDGsという実現すべき目標を共通言語としてまちづくりを考えることで、多角的な課題解決のアクションを積み重ね、誰一人取り残さないまちづくりが可能になると考える。今後まちづくりに携わるにあたり、SDGsの視点を有効に活用していきたい。